

なぜ今 農場のHACCPか？



鳥取県 (有)岸田牧場を訪問 “自分の牧場は自分で守る” 農場のHACCP認証への取り組み TPPは不安 But 安全・安心は消費者から必ず支持を得る

ここ十数年を顧みて、日本の酪農業に襲いかかったBSEや口蹄疫からの不安は記憶に新しいことでしょう。

広島県内の農場でも、短期間に多くの乳用牛が原因不明で死亡し、牧場経営を直撃した事故は、県内の酪農家に衝撃が走りました。

また、乳業界においても食品衛生に触れる事件、事故が多く発生し、国民による食の安全・安心への関心は一層高まりました。

こうした悲惨な経験から、『自らの牧場は自ら守る』との決意のもと、農場のHACCP認証に向かって積極的に取り組む畜産農家(酪農家)が育っています。

中国生乳販売農業協同組合連合会(以降「中国生乳販連」)の会員実務責任者会議のメンバーは大山乳業農業協同組合(以降「大山乳業」)の取り組み農場のHACCP認証等を学ぶため、有限会社岸田牧場を視察訪問し田中徳行場長等にお話を伺いましたので、その内容の一端を紹介します。

注…HACCPとは、食品を製造する際に工程上の危害を起こす要因(ハザード・Hazard)を分析し、それを最も効率よく管理できる部分(CCP…必須管理点)を連続的に管理して安全を確保する管理手法

一 畜産業界を取り巻く 食の安全への意識

畜産業界を取り巻く経営環境は、TPP参加への不安、穀物相場、輸入粗飼料、原油価格の連続的高騰などにより厳しさが増えています。

また、国内でのBSEや口蹄疫など家畜伝染病の発生、乳業界における食品衛生に及ぶ事故などから、国では法整備が進められ、食の安全・安心への対応が強化されています。

このもとで、酪農家にも食品衛生法の改正、かかる食の安全・安心のためのポジティブリスト制度の導入、家畜伝染病予防法改正により飼養衛生管理基準が示され個々で対応すべき義務が増しております。

この義務化に対して、酪農家として「当然対応すべき」、「事務量が増加し面倒」、「事務的な手間を乳価に反映されるべき」とする様々な意見があるのも事実であります。

あなたはどの様な考えをお持ちですか……。



大山乳業 馬野部長

田中徳行 場長

大山乳業
小濱 常務

二 大山乳業と有限会社岸田牧場の農場のHACCPへの取り組み

大山乳業(鳥取県東伯郡琴浦町)の平成二十五年七月時点の生乳組合員戸数は百五十八戸、生乳受託量は四千八百四十五トン、広略の同戸数は百五十四戸、生乳受託量は四千四百二十五トンと同等であります

が、大山乳業は乳用後継雌牛の留保率並びに衛生的乳質(細菌数・細胞数)は全国でもトップクラスの位置にあります。

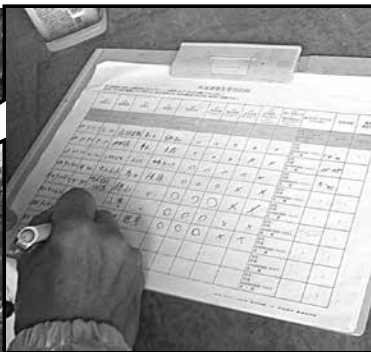
しかも、衛生的乳質では、中国生乳販連の乳質改善目標値の体細胞数基準「三十万/ml未満を占める割合が年間を通じて八十%を超えること」、細菌数基準「十万/ml未満を占める割合が年間を通じて九十五%を超えること」に対して、常に衛生的で安定した乳質を生産し出荷されています。

大山乳業の基本理念には「白の一滴、心の一滴、酪農家の心を食卓へ」が掲げられています。これを成就して行くため、日々向上・発展を目指して組合員、組合、県行政、関連企業の力を結集され様々に努力が重ねられています。

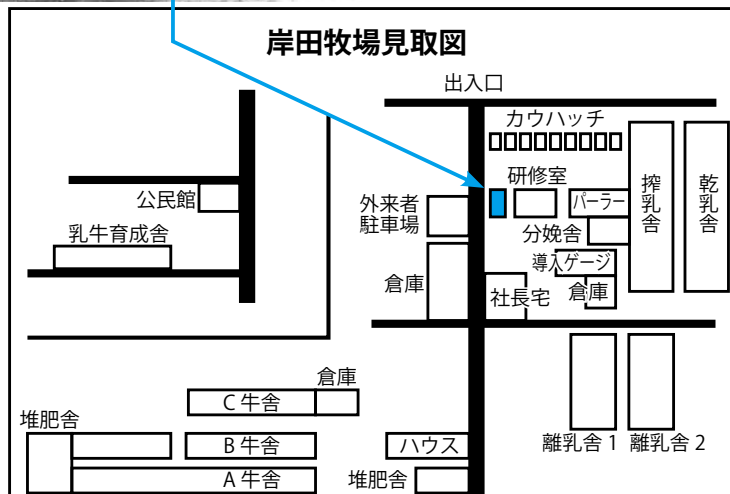
こうした中で、組合員の一人、有限会社岸田牧場では、平成二十三年より国のモデル事業として「農場のHACCP認証」に向けた取り組みを開始され、平成二十五年度の認証完了(認証団体:中央畜産会衛生指導部「農場HACCP認証協議会」)を目指して取り組まれています。

一方の大山乳業では、NPO法人日

本食品安全検証機構から指導助言のもとに、平成二十四年構築した農場HACCPの土台となる「鳥取県版の飼養衛生管理基準」を全戸に普及するため、八月の頭数調査に併せて、普及所、家保の協力を得ながら手始めに鳥取県版の飼養衛生管理基準チェック表で現状把握(二牧場約二十分を要した)にあたられました。



◀来場者のための記帳スペースを確保した「靴底消毒手洗場」



同牧場の経営規模は、経産牛百十九頭、育成牛八十三頭、肥育牛六百頭(ホル去勢肥育)を従業員八名、パート四名体制で管理されています。施設はフリーバーン牛舎、搾乳機械はオートタンデムパーラー四頭ダブル、同牧場の見取り図は、左の図のとおりです。

三 岸田牧場の経済概況 家畜飼養頭数八百二頭

四 TPPは不安

しかし、対岸大陸に牛乳等輸出で展望も

田中徳行場長(三十八歳)は「確かにTPP参加は不安、しかし、安全・安心を担保した生乳生産を实践すること、必ずや酪農経営は存続し、かつ、自由化になった場合も、対岸の大陸に牛乳・乳製品を輸出することも視野にある」と将来への不安よりも希望に満ちた言葉は印象に残りました。

輸出を目指す背景には、大山乳業の生乳品質は「日本一」と自負をお持ちです。確かに、衛生的乳質、乳成分ともに優秀で、生乳の安全・安心を担保するための対応も確立され、総ての酪農家が「大山ブランド」の確かさに自信をもたれ、あらゆる分野に亘り、その責任と行動が果たされていると感じました。

大山乳業の小濱常務は「鳥取県の酪農家と大山乳業の食の安全に対しての意識と行動は明確で、歴史的に宅配牛乳を求める多くのお客様から支持を得ている。たとえ、TPPになっても、県内の酪農家は生き残ると信じる」と

の言葉は酪農家と乳業の連帯感の強さを感じ取れました。

五 だから今、

農場のHACCPが重要

田中場長に何故・今、農場のHACCP認証に取り組まれるのかと質問し、お話を伺いました。

場長は「ここ十数年来で畜産農家は、BSEや口蹄疫を経験して、不安でつらい思いをした。また、乳業による食の事故も発生し、消費者による食の安全・安心に対する要望が一層強まった中で、乳業工場によるHACCP等の取り組み以前に農場(酪農家で生産する生乳や肉が衛生的であることが重要。酪農家の不衛生な生乳が乳業者に送られ、HACCPの管理のもとに製造処理されたとしても市場で販売される生乳は決して消費者から歓迎されない筈。農場から食卓までがHACCPで結びつくことに意義がある」と、生乳や肉、そして食品生産に直接携わる強い責任感を持たれていました。

六 HACCP、牧場作業の

洗い出しがリスク軽減に結びつく

同牧場では、「農場のHACCPを進めるにあたり、搾乳作業、衛生管理、飼養管理など様々な分野において、全従業員とともに洗い出し作業を行い、一つ一つの作業の目的を明確化にし、なぜ必要なのかの整理から始められました。こうして完成した書類一式がマニュアルとなりました。

場長は「従業員の作業交替や新採用時の指導においても、マニュアルは役立つっており、以前は『やったつもり』などの感覚から生乳廃棄による損失を招いた苦い経験もした。HACCPの手続きから、ヒューマンエラーが排除できた」、「バルククーラーの電源投入チェックも従業員一人が確認した後、他の従業員が最終確認をしている」、「一見、面倒と思われる衛生的チェックシートの記帳・記録・保管も充分活用できて、農場をリスクから守られている」、又、「飼料運送業者が牧場に入る際は、我が牧場のルールに従ってもらう。ヘルメット着用、



▼牧場の作業一つ一つを洗い出し、リスク回避策が整理されている。

使用する下履きなど・・・」、「万一、ルールに従って貰えないならば厳しく接している」と飼養衛生管理基準の遵守に向けて取り組み、今では総ての出入り業者に協力を得ておられます。

HACCP認証の手続きを進める中で、PDCAサイクルを回すことで、農場に及ぶ様々なリスクを排除されている。場長は「この取り組みは、収益に必ず結びつく」とキッパリ・・・。

同牧場では、全従業員にあてて「衛生管理方針」を示されています。この全文は次のとおりです。

岸田牧場が従業員宛に示された衛生管理方針

ー衛生管理方針ー

全従業員の皆様へ

現在、消費者が一番求めるものは、品質や価格面は言うまでもなく、最も重要なのは『安全』で『安心』な牛乳・牛肉であるかということです。今後、そのような消費者のご希望にお答えできる商品の提供をしていかなければ我々の将来はありません。

そこで、『安全』で『安心』な牛乳・牛肉を提供する為に、この度HACCPという方法を取り入れることになりました。

これは、皆様が日常担当しているそれぞれの部門(素牛の育成から生乳出荷並びに肉牛出荷)における管理と衛生上起こり得るであろう危険性を前もって予測し、事前にその危険性を予防するために、効果的な管理方法をマニュアル化し、必要なものを記録するシステムです。

この方法の利点は、疾病の予防による生産性の向上と品質保全により安全な生乳・安全な牛肉を作り、またこれらの記録は、消費者に対して安全性を証明し、安心を与えられるということです。

従業員の皆様もこれから激化する商戦の中、消費者の方の信頼を勝ち取り、生き残るためにこの主旨を理解して頂き、以下の項目につきまして周知徹底のご協力をよろしくお願いします。

【関連法規の遵守】

飼養衛生管理基準 10 項目、ポジティブリスト制度、糞尿処理、廃棄物処理などの会社運営上に関する総ての法律に対し、関連ある作業工程においては、法律を遵守すること。

【原材料管理】

原材料の受入については、仕入元との合意により作成した取り決め事項(契約内容)や基準を守っているか等を日常的に管理すること。

【日常の管理】

牛の飼養に関する全ての日々の管理を効果的に行い、健康維持に努めること。

【内部コミュニケーション】

定期的なミーティング、教育訓練などにより伝達事項の徹底、情報の共有化を図り、全社員意識向上および共通認識を維持すること。

【外部コミュニケーション】

関係機関による教育訓練等により、情報の収集および共有化を図り、全社員の衛生的意識向上および共通認識を維持すること。

有限会社 岸田牧場
代表取締役社長 田中 拓三

七 地元三十二名の仲間に
HACCP 認証を推奨

場長は地元後継者等三十二名とも情報交換を図り、共にHACCP認証を目指そうとリーダーとしての自覚は充分で、「今後、日本全国からHACCP等の認証手続きなど、視察要請があった場合は、快く引き受ける。なぜなら、今の自分があるのは、これまでに日本全国の牧場を視察し、受け入れて戴いた皆様のおかげによるもの」と謙虚に話されました。

八 最後に

酪農業で農場のHACCP認証を受けた牧場は、現状、北海道一戸と静岡県一戸の全国で二戸。公益社団法人中央畜産会の第七次指定農場リストによると、平成二十五年度に有限会社岸田牧場を含む七農場がHACCP推進農場に指定されたと公表しています。



「牛乳便り」をPRする岸田牧場の車両(後方から撮影)



今回の指定を含んで全国で計七十九農場がHACCP推進農場となり、認証に向けて取り組まれているようです。酪農経営に襲いかかる厳しさは冒頭掲げるとおりですが、こうした逆境をはねのける決意をもって農場のHACCP認証に取り組まれる姿に共鳴される若い後継者も多いものと思えます。

ポイントは、消費者から指示される生乳生産に如何に取り組むかが重要では無いでしょうか。

同牧場では、『牛乳便り』と称する商品を大山乳業に委託製造し販売され、

販路は拡大しているそうです。ホームページから『岸田牧場 牛乳便り』を検索すると詳細が分かります。

今回の視察研修の紹介から、今後酪農で生き残って行くためには、どう行動すべきかのキッカケとして欲しいものです。

HACCP認証に関して、有限会社岸田牧場への視察を希望される方は、広酪総務管理課までお問い合わせ下さい。また、この記事に関してのご意見を本誌巻末のメールアドレス宛にお寄せ下さい。お待ちしております。

○今月の表紙

▼今月の表紙写真は、カヌー公園(三次市作木町)でカヌーを体験する児童をショットしました。

▼カヌー公園は、NPO法人「元氣むらさくぎ」により運営されています。

▼今年の夏場の猛暑は例年以上と連日発表が続きました。酪農家の皆さんにとっても暑熱対策に余念が無かったものと感じます。

▼写真は、八月十八日に撮影したものです。参加した児童は、インストラクターによる親切・丁寧な指導に耳を傾け、見よう見



まねのカヌー捌きに、あっと云う間に堂々とカヌーを操つり、その目は輝いていました。

▼何事も、スイスイとは行かないこのご時世で、カヌーを漕ぎ操る姿に見とれました。

▼カヌー体験は、三次市内を流れる江の川で体験することが出来ます。

▼秋の行楽のシーズンに紅葉を眺めながらカヌーに興じるのもおつなものと思います。

▼皆さんも、お出かけされカヌーを体験されては如何でしょうか？